まとめに代えて

早くに決められる教育への期待
長く解決しない子育ての気がかり

前回と今回の調査の「子育ての気がかり」上位三つをみると、「友だちとのかかわり方」「ほめ方・しかり方」「子どもの性格、態度・様子」に集中しており、年齢でいうと、３歳から12歳児までの母親が質の変化はあるものの、基本的にはずっと同じような悩みを抱え続けていることがわかった。

今回は、子どもが反抗期や思春期など、むずかしい時期にさしかかるために、その対応にとまどいや不安を覚えて、今までの子育てやしつけのしかたに自信をなくしたり、母親自身が心身の不調を訴える記述も目立った。

また、親の世代の特徴としては、学生時代を偏差値教育の中で過ごし、出産・育児期にしつけ・教育情報を先取りする傾向があった。

現在の中学生が生まれた1985年に、０歳から２歳児をもつ母親を対象に筆者が行った調査では、これから通わせたい教室や習い事として、①スイミングスクール②音楽③スポーツ教室④そろばん⑤習字などの順であげられており、今回の習い事の経験率ともほぼ一致していた。

子どもへの進学期待も、すでに乳幼児期、もしくは出産以前に決定していることが多く、それに向けて習い事や教室通いが始まり、親子でしつけ・教育の「外出型情報ネットワーク」を形成してきた。

今回の調査では、スイミングスクールを筆頭に小３生で93.1％の子どもが何らかの習い事経験があることが明らかになったが、さまざまな習い事がより早い時期から、子育ての中に定着してきたのもこの世代の特徴である。

生活能力は置き去りにして
勉強優先になる“光と影”

「整理整頓・片づけ」「忘れ物をしない」「約束を守る」など、子どもの生活の自立能力については、小学生も中学生の親も同様に悩みの種である。しかし、高校受験を控えた中学生になると、その時期に大切な生活能力よりは、勉強の成績のほうに親の関心が移行していた。

まさに一人っ子政策下の中国での小・中学生を彷彿とさせる状況である。現在、中国の都市部では、家族の先鋭化された期待が一人っ子に集まり、「高分低能」が問題視されている。勉強では高い点数をとっても、生活能力が低いという学力偏重教育が招いたひずみに、親や教師が頭を痛めているのが現状である。

今回の調査では、小学生で中学受験をさせた親が、すでに中学生の時点で、その結果のさまざまな弊害に気づき悩んでいる記述もみられた。たとえば、中学受験の勉強や塾通い、小さなときからの多様な習い事ジプシーのために、「友だちと遊ぶ時間や余裕がなくなり、休みの日にもテストで忙しく、家族で遊びや旅行にも出かけられなかった」「子どもにはストレスとなってかわいそうであった」とか、「家事の手伝いや片づけなどは、何もしないまま育ってしまった」など、子どもの将来を考えた上での教育の先取りも、親の意向が強い塾通いや習い事の課題や練習の過度な強要は、子どもへの精神的に不適切なかかわりと言わざるを得ない。

さらに、生活自立がなされないままに育つ危うさは、子ども自身にも親自身にも将来にわたって大きな影を残すことになるであろう。

（山岡テイ）